
或いはそれこそが平穩な日々

寝村萬寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或いはそれこそが平穏な日々

【Nコード】

N6604G

【作者名】

寝村萬寺

【あらすじ】

平穏に日々を暮らしていた家族が奴隷になっちゃう話です。目指せハッピーエンドでプロット作ってあるんだけどどうかなあ。ちゃう遅筆です。すんません・・・批判批評バッチコイ

プロローグ

あたりが薄暗くなり夕闇が訪れる頃、雪が降ってきた。

タリアは舞い降りてくる雪を見て羊を大急ぎで小屋に戻してから家に帰る。羊小屋からタリアの家は少し距離がありゆっくり歩いていると雪だるまになってしまいそうなので小走りに帰ることにした。途中で行く手を阻むように立っていたキーゼルおばさんに

「走ると転ぶよ」

と注意されたが、

「走らないと寒いの」と言い訳をした。話し始めると止まらないおばさんをおかして、家に入ると母は夕餉の準備をしている。心地よい暖かさと夕食のにおりが彼女を包んだ。秋の収穫を使い過ぎないようにやりくりするのは大変なようだ。

「お母さん雪が降ってきたわ。」

「あら、積もりそうなくらいなの？」

と尋ねられたので首を横に振った。そろそろ春が来るころあいだったし、雪が積もるほど寒くも無い。

「そう、じゃあいいわ。羊は戻しておいてくれたわね。アコを見ておいてちょうだい。すぐご飯にするから。」

そう言うと母は忙しそうにキッチンへと戻った。

いま家にはタリアと母親、まだ二歳になったばかりの弟の三人しか居ない。父親が居るが今日は税金を支払うために都会に出ている。父は数日、家を空ける予定であった。その間、母さんとアコを頼むなどと言う父の言葉から強い使命感のようなものを抱いてタリアはいつもより張り切って家の手伝いをしていた。幼い弟が笑顔で抱っこを要求している。

タリアの家は貧しい小作農である。勤勉な両親のわずかばかりの収穫と家畜、内職による収入で家族四人がなんとか食べていける程度の収入を得ていた。父も母もタリアに仕事をさせるのを嫌がった

ため彼女は家事や収穫の手伝い、家畜の出し入れ程度の仕事しか与えられなかった。タリアはもつと仕事を任せてくれても大丈夫だと主張したがお前が大人になってから私らに楽をさせてくれればいいと言つて少し悲しげに答えるだけだった。

タリアには記憶にない兄が一人居た。ユーリと名付けられた少年にはタリアの両親のほかにも祖父母がいた。祖父母は自分がかつてそうされたように、そして息子にそうしたようにユーリにも過重な仕事を科した。そして少年は文句も言わず黙々と働きポキリと折れるかのように死んだ。父親は自分の両親を責め、母親は両親を止められなかった自分を責めた。その後、祖父母は報いるように死に両親は子を働かせないように誓つた。

そんな両親の変わった教育方針によつて彼女は労働から開放され、修道学校に通つていた。農家の子で学校通いをしていたものは非常に少なく、クラスメートは三十人程度で年齢もバラバラだった。

「また、クラウディア先生と喧嘩になつちやつたの。」
マメとジャガイモのスープを食べながら学校の話聞かせるのはタリアの日課である。両親ともに学校に通つた事がなかったため彼女の話を楽しそうに聞く。

「あなたがおかしな事を言つたんでしょ。」
と弟にご飯をあげながら母が茶化すので、違つるとタリアは反論した。

「先生に一から十までの足し算をしてなさいって言われたから答えを言つたら勘で答えないようにして怒られたの。」

「勘で答えたの？」

「違つよ。ちゃんと計算して五十五ですつて。なのにそんなに早くできるわけ無いって言うの。」

アコが小さな首であくびをしている。眠いみたいだ。

「一足す十は十一で、二足す九も十一でそれが五個あるから五十五になるつて説明したら横着するなつて。」

母はアコを抱きかかえて彼の頭を撫でながら、横着しちゃ駄目だわ

ね、と言う。

「横着して無いもん。だって楽に数をかずえるために算術をするんでしよう。なら楽なやり方でもいいじゃない。」

むくれるタリアを見て母はそうねと微笑みかけた。

「でもね。タリア、クラウディア先生には先生なりの考えがあつて怒つてらっしゃるの。」

ね、とタリアの目を見ながら彼女のおでこを撫でた。

「わかった。明日先生に謝る。」

彼女が仕方なくそう答えたそのときは、まだその家族は幸福を湛えていた。

襲撃

アコを寝かしつけて帰ってきた母が椅子に座るとなにより周囲が騒がしい事に気付いた。家の外から聞いた事無い金属音がする。なんだろうと思いい見に行こうかと言う話をしていると扉が物凄い音を立てた。

夜半を待ち忍び寄る。捕まえた人数とその質で払われる日当が決まる。若い女は見栄え、若い男なら丈夫さが質で、子供は安値で買いい叩かれるが将来性から年寄りよりは良い値がつく。年寄りは足が出ることもあるから大体置いていくか殺してしまう。彼等のルールはその程度だ。蛮族を攫って皇国の奴隷商人に売りつけるのが仕事である。

気が向かないな、忙しそうに家に入っていく少女を眺めながらコルチはそう呟いた。通常、遊牧民や異民族の襲撃こそ頻繁にやって来たものの、辺境とは言え決まった領主のいる普通の村落を襲うのは初めてのことであったし元来極めて稀な事である。

「これじゃまるつきり戦争じゃねえか。なあ。」
と部下に話し掛けたが、俺らを攫った時は戦争じゃねえってか、
と言いつ返されるとそりゃそうだ苦笑するしかなかった。家々の煙突から上がる暖炉の煙がまるで襲撃の狼煙のように立ち上っていた。日はとつぷりと暮れ、雪が音を吸い込む。進撃の旗が上がる。武器の冷たい金属音が村に向かっていった。

コルチはドアを蹴破って家に入り中を見回す。少女と若い女がいる。家の奥から泣き声が聞こえる。

「亭主は居ないのか。」

母親らしき女が今は居ないと答える。女は素早く娘を背に回し

「必要なものなら何でも持っていくてください。お金も何もありません。

せんが家族が食べていく最小限の食料以外ならなんでも差し上げます。だから。」

気丈な女だなと思いつながら、コルチは鍋の中のスープを覗き込んだり、家の奥を見て回った。

「その必要は無い。俺はお前らを攫いに来たんだ。申し訳ないがあんなたちには奴隷になつてもらう。家の外に私の仲間を二人待機させているから子供を殺されたくなければ従うように。」
若い母親と娘に冷たく無情な言葉を放った。

タリアの家は幸運だったと言える。家の外に連れ出されると、村はまさに阿鼻叫喚と言つた様相であつた。父の名を叫びながら家から引き摺り出される子供、頭から血を流す男、服を引き裂かれて半裸の女、そして見なれた顔をした死体。他の家を襲つた闖入者たちは、平穩に暮らしていた家族が始めから奴隷であつたかのように随分手荒に扱つていた。あまりに異様な光景を目にして少女が足を止めると、背中を槍の柄で小突かれた。鎖で長く連なつた手錠には既に近所の住民達がつながれていた。

錠に連なる見慣れた人たちの顔が泣いたり叫んだり激怒したり絶望したりしている。子供は鎖につながれなかつた。代わりに赤子を持たされたり略奪品を持たされたりしている。言うまでもなくタリアはアコを抱き鎖につながれた母に寄り添つていた。

「これに乗れ。」

そうして指差された先には頑丈そうで深淵な闇を湛えた馬車のような、しかし中に入ると内側からは出られないであろう乗り物があつた。母と離れたくない思いもあつたが馬車の中の疲れきつた少年達の顔を見て抵抗をあきらめる事にした。

タリアは雪を見ていた。夕方に降り始めたこれは警告だつたのだろうかと言つ気さえして、ただ呆然と堅固な鉄格子越しに巨大な馬車からの風景を見ていた。アコが泣き止まない。夢なのかもしれない。

いと思えてきたその時、ガキを黙らせる、と窓の外から怒鳴り声が飛び込んできた。アコは怒号に驚き静かになった。馬車の中の子供達は死んでしまったようにしかし暖かさを保つために寄り添いながらじつと座っている。実際に寒さと攫われる時の暴力で数人死んでいた。泣き疲れてぐったりとした少年の目が闇の中で月光を湛えて光っている。馬車の揺れに同調して動くその光点は何ら意思を湛えてはいない気がする。見ていてはいけない気がしたのでタリアは再び外を眺めた。

大人たちは馬車に乗せられることなく歩かされている、ある人は着の身着のまま、ある人は半裸で、ある人は泥や血ににまみれて時折馬車から子供の遺体が捨てられる。そのたびに嗚咽と憎しみの呪詛が聞こえてくる。次第に呪詛の連鎖が大きくなるが、従わざるを得ない両親たちはうな垂れつつただ歩く事が人生の目的であるかのように歩行に集中しているように見える。そんなままで見た事もない顔をしている人たちが、数日前までただの優しかったおばさんや厳しいおじさんだった人たちである事を見せ付けられる。夢じやない。そう思わされタリアの頬を泪がつつた。気付くとアコは静かになっていたが吐息を聞いて安心した。

自分が寝ていた事に気付くと馬車が止まっていることにハツとした。小さな鉄格子から日の光が差し込んでいる。寒さに耐えられなかった塊があつたが気付かないフリをした。なんとか寒さをしのいだ子供達は相変わらず寄り添っている。肌が触れ合っていると家族を思い出せた。体温を家族の温もりに変えて心細さをしのいでいると荒っぽい音を立てて扉が開いた。子供達の怯えた目が音源に向く。「めしだ。」

と言う声とともに冷たく固いパンが投げ入れられた。ノソノソと小さな影がそれをむさぼる。アコの幼い顎には固すぎるのでタリアがよく噛んで与える。空腹を満たすと誰かが

「ここで到着なのかな。」

と誰に言うでもなく呟いた。馬車全体が沈黙に包まれる。もう一晩

この冷たい箱の中で過ごすのはアコにとって危険なように思えたのでタリアは決意した。格子窓の外を見るとそこは見知らぬ風景で幼い頃にみた領主様の町への道とも違って思えた。彼女はまだ目的地までは時間がかかることを悟り、近くを通った大人に声をかけた。

「すみません。」

奴隷の少女に声をかけられることなど初めてだったので傭兵はうろたえた。傭兵には元来柄の悪い人間が多いので子供に声をかけられるようなことは滅多になく、ましてや奴隷の子とに声をかけられるなどかつてなかった。本来怒号で帰すべき所にもかかわらず思わず出た言葉は

「どうした？」

しまったと思っただが返事をしてしまった。

「何人が凍えてしまいそうな子がいるからなにか羽織る物をもらえませんか？」

ああ、と曖昧に頷き傭兵長のコルチに話してみた。

「案外お前も優しい奴なんだな。」

と揶揄したがコルチは直接少女のところに行った。

タリアはどうなるのかドキドキしながら待っていた。殴られるかもしれない。殺されるかもしれない。でもこのまま無視されても次の夜を小さなアコは越えられないだろう。そう覚悟していた。

「お前か。」

格子窓の外から聞こえてきたのは前に聞いたことのある声だった。外を見ると声の主は自分の家を襲った男だった。恐怖と怒りがない交ぜになったような最悪の気分で黙ってその顔を見た。

「何でお前らに毛布をくれてやら無きやならんだ。あと二晩そこで我慢してりや良いんだ。食べ物だけでもくれてやってるんだから文句言うな。」

コルチはそう突き放した。タリアは最悪な気分だったが少しのあいだ眼をつぶり気を取り直して

「でも、私たちを殺す気はないんでしょう？殺すんならこんな馬車

に乗せる必要はないもの。布切れ数枚くれればみんな生き残れるのよ？たくさん生き残った方がいいでしょう？」

そうまくし立てた。その夜、馬車には毛布が投げ込まれた。

奴隷市場（前書き）

前の章もちょっと追加してるんで読んでくれるとありがたいです。

奴隷市場

一ヶ月に渡る旅路で攫われた多くの村民が凍え死に、それを補うかのように見知らぬ人々が追加された。時折、大人たちによる脱獄計画や家族を思う人々による奪還作戦が実行されたが、全てが灰燼と歸し村人達は奴隷達に変わっていった。そんな中でタリアとアコは何とか飢えと寒さをしのぎ、ぼろきれと言ったほうがよいであろう毛布も夜をしのぐのに必要なくなってきたころ目的地についた。

「出る。」

そういわれて開いた扉の向こうは見た事もない広大な広場と民衆の熱狂だった。

その広場はカルタスという都市にある。神聖皇国の一大農地の集積地であり、また最大の奴隷市場を内包する都市である。交通網が整備され下水道が整備され人でにぎわう清潔な町並みに、唐突に連行されてきた被搾取者たちは驚いた。彼らが知っている最大の都市は彼等の領主の町だったが人口だけでもカルタスはその10倍をゆうに超えていたし文化的レベルもかなり高い。カルタスの歴史は長く神聖皇国に組み込まれたのは半世紀程度前である。広大な農地に毛細血管のように交通網を発達させ、異民族を農夫として呼び集めて利用することで莫大な利益を上げていたが、半世紀前に侵略を受けてからは農業だけでなく近隣地域からの奴隷の集積場としての規模を更に拡大している。

競りは既に始まっていた。大きな円台が幾つかあり、その上に全裸にされた村人達が立っていてその脇には服を来た男がうるさく吼えている。その台を囲うようにたくさんのお男たちがなにやらよくわからない単語を吼えている。異様な光景にタリアが愕然としていると頭をひっぱたかれた。

「ぼんやりすんな。こっちに来い！」

ついていくと手錠をされ、引つ張られた。アコは不安な足取りで

何とかついてきた。途中で何人が知り合いを見た。全裸で壇の上で値踏みされていた。タリアに優しくったおねえさんは泣き顔で手足に鎖をされてそれでも乳房や股間を隠していたが何故かそれを美しく感じてしまった。現実感が無いせいだったろうが罪悪感を感じた。同じ台の所に母親もいた。

「お母さん！」

そう叫んで駆け寄ろうとすると、ガクンと両手に痛みが走った。

「こつちだ！」

傭兵が強く鎖を引っ張り思わず膝をついてしまった。お母さんお母さんおかあさん、口の中で呟いて首を上げてみると母と目が合った。タリア！行きなさい！アコをお願い！」

母はそう叫ぶと傭兵に頬を叩かれていた。アコが覚えたての言葉で母を呼ぶ、あふれ出る涙が抑えられなくなった。鎖で動かしづらい両手でアコを抱きかかえ母の方を見ないようにタリアは歩き出した。涙がタリアの頬を伝いアコのおでこを濡らす。大丈夫だから大丈夫だから母を呼ぶアコに行っているのか母に全てを任された自分に言っているのかわからなくなりながら彼女はそう呟きつづけた。

連れて行かれた先もまた円台だった。子供の奴隷は案外と良い値がつく。もちろん成人ほどでは無いがすれっからしの老人やら醜女よりは過大なほどの値がついたのである。一部の変質者にとつての性的愛玩具としてももちろん良い値がつくが、むしろ投機目的としての購入が大部分である。当時、戦争の減少により奴隷の価格は高騰していたので投機目的であれ労働力として即戦力となり得ない少女を購入できるのは相当な資産家に限られる。とは言えカルタスは空前の好景気に沸いていたので奴隷市場もまた沸きに沸いていた。

「さーて、次は、なかなかの美少女！母親が美人なんで将来美人になるのも確實！値上がり確實の有望株ですよ！」

後ろからせつつかさされて台に上がるとそのガキはついてくるのかと怒号が飛ぶ。急いでタリアを引き摺り出したもんだからタリアはア

コを抱えたままだったのだ。司会はまごついている。

「あたし、この子の分も働きます！だからお願い！」

タリアは先手を打っておくことにした。渋々、彼女の要求は受け入れられた。これからも投資が必要となる子供二人の価格としては妥当であるう金額で競売は一度落ち着きを見た。しかし司会が喋り始めた。

「ただいま彼女の仕入れ元であるコルチ傭兵長から耳寄りな情報を得ました。なんとこの少女、傭兵に頼んで毛布を用意させたと言う事です。」

だからなんだと値段を上げたくない買手は声を上げる。

「考えてみてください。両親もいない心細い馬車の中で自分の体調管理のためあの強面の傭兵たちを相手に毛布を用意させる度胸、そして知能、もう少し高値を払っても良いのではないのでしょうか！」単に寒かったただけだろうが、どこが知能の証明だとか罵詈雑言が浴びせ掛けられる。すると円台上に傭兵長が現れた。

「俺は過去数多の奴隷を攫ってきた。彼らを奴隷として力でもって平伏させてきた。その経験から言わせて貰うとコイツはかつて見たことが無い奴隷だ。それだけは保証できる。」

「根拠を言え根拠を！」

「ああ、もちろんだとも。武力で捕虜や蛮族をひっ捕まえてくるわけだが捕まえて連れてくるまでの道のりで多くの奴隷が死ぬ。長い道のりに耐え切れない弱者や厳冬に凍え死ぬ者が少なくない。我々もそれを選別に利用しているのも事実だ。そんな選別を彼女は生き残ったんだ。寒いから毛布をくれとか飯をもつとくれとか言う自分勝手な言い分でモノを要求してくる者も数は少ないが居た。コイツの特殊性つてのは単にモノを要求したんじゃなく提案してきた事に有る。毛布をくれれば全員生き残らせられますよ。そんな風に俺に提案してきたんだ。必要な物資の分析力、そして何より要求を相手が飲みたくなるように仕向ける状況の把握力、自己の悲劇的状況と生存に必要な物資を計りにかけて物資を選ぶ冷静さ、これは知能に

他ならないだろう。」
「さあ、皆さんもう一声、司会がそついうと同時に入札の怒号が響いた。」

奴隸生活の始まり（前編）（前書き）

遅筆過ぎるので前後編に分ける予定はなかった。一話分を二つに分けます。つか説明文ばっかで申し訳ねえっす。

奴隷生活の始まり（前編）

高い買い物をしたな。エウティケス・アルブスクは姉弟を買った事をやや後悔していた。円台に出てきたときには何の興味も湧かなかったが、どこぞの傭兵が付加価値を説明すると回りは異様な興奮に包まれ彼女らの値段が上がっていくのを見て彼は彼女を買わずに入られなくなってしまうた。アルブスク家は堅実な事業を元に財を成した資産家である。エウティケスはカルタスで単に財をなした事だけでは満足行かなかった。単なる成金として貧乏貴族や左遷役人たちに嘲笑を受けるのが我慢ならなかった。カルタスで有力者として或いは権力者として誰の嘲笑も受けなくなるためにはいくつかの事が必要であった。

その一つとして、自分の財力を見せつける事があった。タルカスは奴隷商と農夫たちの作った街であるので、最も高価な奴隷や評判となる奴隷を購入することは有効な誇示であるのだ。しかしエウティケスが買った児童奴隷では購入自体より育成の方に大きな比重が置かれる。如何に高額で児童を買っても愛玩する者は嘲笑と軽蔑を浴びせ掛けられるし教育を受けさせても出来が悪ければ成人後に買ひ叩かれる事になる。しかし、教育に成功を修めれば、優秀な右手を得られるか悪くても高額で売れる。しかもその家の教育が成功していることを示す事にもなるので言えとしての格が高まるのだ。タリアとアコは農奴二人分の金貨で買われたがこれは破格の高値である。エウティケスは家の評価を上げるために大きな賭けに出たといえる。

アコの手を引いて石畳の道をついて行く、見知らぬヒトの背中を見ながら。タリアとアコ以外の奴隷達は四人いたが、鎖をされていたので非常にゆっくりだった。タリアは激しい不安を感じたがアコの手を感じておもてに出さないようにしていた。見知らぬ背中が語りかけてきた。

「良かったわね。エウテイケス様は厳しいけどちゃんとした人よ。変な事をさせられるような事はないわ。」

涙をこらえるのに必死で声が出ない。はい、とだけ答えた。

「私も奴隷なの。楽じゃないけど決して悪いご主人様じゃない。大丈夫だから安心して。」

あの、とタリアは声を出した。

「ドレイってなんですか？」

自分の身の上を全て説明されてはじめて、理不尽な暴力で彼女が奪われたのは彼女が両親のものであることであると気がついた。メツテラという名の見知らぬ背中は優しく全てを教えてくれた。タリアが売られた事、そして今後ふたたび売られるであろう商品である事、理不尽な暴力の強大さや広大さ、偉大さ。背中が言いたかったのは要するにあきらめると言う事だった。

「お母さんがどうなつたかわかりませんか？」

「わからないけど、知らない方がいいわ。」

涙が溢れ出た。声も立てずにタリアは泣き始めた。メツテラはタリアが泣いているのに気付いて優しく抱いてくれた。大変だったわね、そう声をかけてくれた。

タリアはそこを集落だと思った。長く続く壁に囲まれ巨大な門があり、その中に公園があつてそれを取巻くようにいくつかの建物がある。忙しく人々が行き来している。

「ここがあなたの仕事場よ。」

「この村が？」

メツテラはなにを言ってるのかわからなくて、聞き返すように首をかしげ

「このお屋敷があなたの仕事場で、あなたの住むところなの。」

そう説明してくれた。少し間を置いてようやくこの長い壁で囲まれて大きな門と広場があるモノが個人の住居であると認識した。大きなお家ですね。そんな言葉しか出てこなかった。気付くとタリアとアコ以外の奴隷達はいなくなってきた。一緒に変わってきた人たち

は農業の奴隷なのだそうで別の場所に連れて行かれたのだという話だった。

アルブスク邸は北側の巨大な門と高い塀に囲まれた四角の巨大な敷地内に中庭を中心にして三つの建物からなる。東側には倉庫と屋敷付きの奴隷達の住居、西側には仕事場があり、奥まった南側の建物が主人一家の住居となる。アルブスクは農業によって財を成した地主がもとである。農奴として奴隷を購入して農繁期には彼らを使役し、農閑期に農奴に建設業をさせることで資産を増やしていった。その後、農奴の貸し出しや販売など事業を拡大しカルタスで地位を確立した新興の資産家である。この邸宅のほかには農地と農奴の宿舎、農具や武器の工房などを所有している。農作物の管理や建設物の工期、資金運用などアルブスク家の頭脳とも言える要所が東館である。エウテイケスは自分の仕事部屋で奴隷の届け出書類や購入資金のやりくりなどを行っていた。想定よりやや多い出費を補うためにどうするかを考え、購入した奴隷の利用法を相談しているとノックの音がして少女がつれてこられた。アルブスクは奴隷の仲買や貸し出しをしたことはあったが育成と言うのは初めてだったので正直エウテイケスは頭を悩ませていた。ボロ布をまとった少女はあかじみている。養育にかかる費用を考えれば若干はアシが出るだろうが背に腹は変えられんななどと考えていた。

「名前は？」

「タリアと言います。この子はアコ。」

「歳は？」

「八つです。この子は二つ。」

「字は書けるか？」

「はい。」

はい、と言う返事が返ってくると思っていなかったのでエウテイケスは驚いた。皇国でも貧困層の識字率は低く、辺境異領の奴隷少女が文字を知っているなどにわかには信じられない事であるためであ

る。近くに寄らせてコップの水を使って字を書かせると、つたない字ではあつたが「私はタリア。あなたはどなた？」と書いた。思わずハツとして

「これは失礼した。ワシはエウティケス・アルブスクと言う。今日からお前の主人となるからご主人様と呼んでくれ。」

そう言いながらエウティケスはにやけるのを止められなかった。農奴二人分の金で買った奴隷が既に文字を書ける、これは自分のした賭けに既に買っていることを示していたためである。それと同時にこの利発な少女の価値をより高くしたいと言う欲望が湧いて来るのを感じた。

「ここで私は何をしたらいいのですか？」

そう聞いてくる少女に、そうだなとエウティケスは居住まいを正し

「少々の家事と、我が家の子と一緒に教育を受けてもらおう。」

にやりとして

「その前に風呂に入ってもらわんな。」

とつまらない冗談を言った。

奴隷生活の始まり（後編）（前書き）

細かい所をつめるのに時間がかかりすぎるってのはやっぱり才能のなさの表れなのかもわからんよとか思いながらよつやく書き終わりました。細かい所つめるっていつてもちっちゃな設定がだらだら続いちゃってなんか申し訳ないなあ

奴隷生活の始まり（後編）

奴隷にされる者にはあらゆる理由があるが大別すると人身売買、戦争捕虜、人狩りによる異民族の三つがある。人身売買は古くから農村で行われて居り一定量が確保されているが決して多数ではない。人狩りもよほど奴隷が不足していなければコストに見合わないため行われにくく、そのため戦争捕虜が多かった。戦時下に

おいては多量の奴隷が発生する。しかし、この時代の皇国は領地を統治するのが困難になるほど広大であったため新規の侵略による捕虜の獲得はほとんどなく、これを受けて奴隷の値段が高騰し、安くない奴隷を早死にさせないためにそれほど酷い扱いは受けていなかった。

実は全て夢で朝起きると母が朝食を作っていたりするんじゃないかと言う願いが、まさに自分の夢であると冷静に判断できるようになる頃、タリアは豪邸での生活にすっかりなれていた。早朝に起きて、主人たちが起きるより先にアコや他の奴隷とともに朝食を取り、屋敷を掃除して廻る。アコは工房で働いている解放奴隷の家が預かってくれる事になっておりそこに預けた。主人の娘を起こして、着替えを手伝い朝食を取らせてその少女とともに勉強する。昼食は家族はそろわず各自でとって、家にいるものの分は奴隷が用意する。奴隷も個々で昼食を取り、タリアはこの後も少女とともに学問に励む。授業で簡単な算術、文字、歴史や地理学それに加えてマナー教育などを教わっていた。村の学校とは違いタリアが横着な解き方をすると先生は褒めてくれた。算術をしている間は全ての不幸を忘れていられた。村が焼かれたこと、両親に会えないこと、そしてアコのこと、忘れてはならない忘れたい事を。一抹の罪悪感を抱きながらも思考することの快感に溺れていた。夕方になると主人達の晚餐の準備を行い、片づけをしてからようやくアコを迎えに行き自分達も夕餉を取る。そして就寝する。

先述の少女の名をルルティアといい、タリアの一つ下の長女である。母親譲りのふわふわしたブロンド、輝く碧眼と母親の趣味によるひらひらした衣服はまさにセレブリティの美少女といった容姿ではある。しかし、せっかくの衣服を雑巾に変えてしまう活発さを兼ね備えており、せっかく雇った家庭教師の授業をサボるのは日常茶飯事であったが皇国では女性に学問が不要であると言う考えが大勢でありエウテイクスもまたそのように考えていたので彼女は自由奔放な少女時代を送る事になる。実質的に家庭教師による授業はもっぱらタリアと次男のアウルスに対して行われる事になる。

アルブスク家は主人と嫁、二男一女の家族であり長男は二十四才ですすでに父親の仕事を手伝っていた。次男のアウルスは十六才、私塾に通っており、一族から公務に携わる者を輩出すると言うエウテイクスの願いをになっている。

皇国は公務員を貴族に限定していなかった。激しすぎる領土の拡大に伴って必要となる人材が多すぎ、血縁のみで雇っていたのでは追いつかなかつたため、自国民であればいかなる身分の物であれ登用する事を選択してその選別に博識者による推薦と試験を課した。

「皇務員登用試験制度・メライトシステム」である。試験には、実技、筆記試験および口頭試問が科せられ体力、知識そして瞬発的な智慧が要求された。

アウルスは紛れもなく受験生であったが皇務員試験への推薦はすでに得られていたし、試験に受かるのに十分優秀であるように思われたためそれほどピリピリはしていなかった。あるときアウルスが私塾で出された課題をしていると奴隷の少女がお茶を持ってきてくれた。以前、家庭教師から奴隷の少女が随分と優秀であると聞かされていたので休憩がてらいくつか問題を出してみようと思った。初等教育しか受けていないと言う話だったので、自然数に限定した安易な整数問題を出してみた。

「7を50回掛け算すると一の位はいくつになると思う?」
彼女は少し考え

「9です」

と答える。なるほどなかなか賢いようだ。あるいは勘で言ったのか
と、思いどう解いたか聞いてみた。

「7を二度かけると47です。三度目は343。四度目は2401。
ここまで計算して一の位には法則があることに気付きました。五度
目で7に戻ってくるはずですよ。だから50を4で割って余り2、二
回かけたのとの位は同じだと思いました。」

アウルスは少し面白く感じて暇つぶしに連続数や負の数などの概念
を少女に与えてみた所、目をキラキラさせながら話を聞いている。
教わるばかりだったので教えるのは彼にとって新鮮で楽しかった。
またそのうち教えてあげようと約束してふたたび机にむかった。タ
リアは嬉しそうに部屋を出て行った。少女はその夜ワクワクしてな
かなか寝付けなかった。

彼女の才能は数学に限定された物ではなくあらゆる学問をまるで
スポンジのように吸収していった。昼間の授業では基本的な事項を
習い、夜中の逢瀬は秘匿するようにしていた。逢瀬と言っても言う
までもなく肉体関係ではなく理知的な会合と言った方が正しいが、
秘匿することによって何故だか二人とも単に勉強する以上の楽しさ
を見出していたし、なにやらエロティックな興奮も内包しているよ
うに思えるので「逢瀬」と呼んで差し支えないだろう。

ある時、アウルスは自分の生徒の優秀さをはかってみたくなった。
彼女の知能を私塾の教員に評価させるため先日出た物理の課題を少
女にも解かせて、それを教師に自分の物として渡してみることにし
た。おそらく怒られるだろうがそのときに説明すればいいと思って
いたが、彼女の書いた論文は教師を飛び越え教授に渡され、私塾で
はちょっととした騒ぎが起きてしまった。「落下に関する考察」。モ
ノは重い物ほど早く落ちるし、軽い物ほどゆっくりと落ちる。そう
考えるのは未発達の文明においては至極当然のことである。彼女は
これに以下のように反論した。

「重い物Aと軽い物Bを糸で繋いで出来たもつと重い物A+BはA

より重いのにBに引つ張られてAよりゆっくり落ちることになってしまっじやない。そんなのおかしい。」

教授はこの論文に閉口し、受験を控えた十六歳の少年の脳髓に恐れをなした。すぐにあらゆる実験を行って重力と空気抵抗を見出し、のちにこの教授は重力の第一発見者として歴史に名を残す事になる。最も驚いたのは少年だった。あれは自分の書いた物でないと言い出すタイミングを完全に逃してしまっていたのである。なにやら大きな騒ぎになってしまつて、誰かの逆鱗に触れはすまいかとヤキモキしていたが別の日に教授に呼ばれて

「あの論文をワシの書いた物にさせてくれれば皇務員登用試験には零点でも受かるだろう」

その言葉の意味する所をすんなり理解した少年は奴隷少女のことを言わなかったのは正解だったかもしれないとおもいながら「よろこんで」と答えて握手を交わした。

家に帰るなり父親にメライトシステムに受かったとことの顛末を説明するとエウテイケースは狂喜した。しかしアウルスはタリアのことは秘匿しておく事にした。自分の父親に見栄を張りたいのもあったがそれにもましてその少女の価値を秘匿しておきたかったのだ。上機嫌の父親に合格祝いをお願いを一つ聞いてもらつても良いかと尋ねた。

「ああ、何がほしい？何でもやろう。屋敷でも馬車でも奴隷でも。」「奴隷を下さい。タリア、あの奴隷少女を。」

一転、父親の顔色が曇つてしまった。言いくい事でもあるかのように、かつ疑いを持った眼でアウルスを見つめて

「やはりあの少女とそういう関係なのか。」

「そういう？」

「夜な夜な会っているそうじやないか。妹と同じぐらいの少女と寝ているのか。」

全くの誤解を受けてアウルスは思わず声を上げて笑つてしまった。確かにあの秘密の逢瀬は参加していない者から見ればそう見えただ

ろうなと思いつながら、父親に夜の健全な授業を説明して聞かせた。

「教えると言うのは、思いのほか勉強になるものです。あの子は優秀ですし見た目も悪くない。ですから官吏になってからの秘書として登用もできると思うて居るんです。」

殊勝な事をいう息子の成長に感慨深さを感じながらもそれでもやはり不安は完全にはぬぐいきれなかった。

「いいだろう。あの奴隷はお前に与えるが、それでも男女七歳にして同衾せざだもう二人きりで出会うのは許さん。いいな。」

父親の的外れな不信を内心で笑いながら神妙な面持ちで「ハイ」と頷いてみせた。

家族（前編）（前書き）

遅いのは忙しいからというのが大きいのですがプロットって中身の細かい所が詰められてないから結局細かい所をああしてこうしてってやっていると時間がかかってしまうなあ。キャラクターが小説の中で勝手に動き出すとか体験してみたい今日この頃です。

家族（前編）

エウティケア夫人はまどろみを愛する人間の一人であった。朝は少し早めに起きるでもなく起きて、清潔に保たれたシートに包まれて一人で寝るには大きすぎるベッドから熟睡するには光が入りすぎる巨大な窓を眺めながら、眺めるでもなく外を眺めるその時間を愛していた。元来さして名家の生まれでも無い彼女がエウティケアの後妻として据えられたのは彼女の美貌による所が大きく、それゆえ自分の出自からすれば分不相応といつても過言ではないその生活を目覚めの時から楽しんでいた。元氣すぎる愛娘やいつまで経つても自分に懐かない先妻の息子たちのことを思い出してうんざりして思わず首を振った。氣を取り直して日を浴びよう外の方を向くと窓辺に人が立っているのが目に入った。もう家事奴隷が起こしに来たのかと辟易としつつ

「もう少し寝かしてちょうだい。」

と聞き入れられることのない願いを声にした。エウティケアは時間に厳格な男であったので少々ぐずった所で無理やりベッドから引き離されるのだ。しかし今朝に限っては返事がない。夫人は不審に思つて窓辺に立っている人影に目をやった。それは女だった。端正な横顔、きれいに整えられた長髪、地味では有るが清潔さを感じさせる衣類。どう見ても奴隷ではないその女は、その端正な横顔に偉大さすら感じさせる微笑を湛えながら窓から階下を見つめていた。

「あなた誰。」

そう言い終わるより早くその人影は消え去った。夫人は部屋を見回して絶叫した。

かなり暖かくなつてきて、タリアの涙は枯れ果てた。少女は自分の目を自らに持たされた悲劇から学問への興味へとそらす事で受け入れることができたがそれは同時に罪悪感を呼び起こした。彼女はこれと言つた目的もなくただ漫然と学問をし、アウルスが皇務員登

用試験の始めから決まってる結果を受け取り安心してゐる頃、なんの脈絡もなく夢を見た。父も母もまだいっしょにいたあの村の夢だった。

父親がそこにいていつものように内職の仕事をしていた、それだけで何故か嬉しい自分を不思議に思いながらそれでも父の背中に話し掛けられないでは居られなかった。

「ねえ、お父さん。何で私に勉強をさせるの？算数や文語はなんの役に立つの？」

娘にそんな事を聞かれて父親は少し考え込んだ。うーんと唸りながら答える。

「確かに勉強が出来ても飯の訳には立たんかも知れんなあ。」

「じゃあ、あたし家のお手伝いする。お手伝いするの全然嫌じゃないよ？」

「でもなタリア。学問してれば自分が困った時にどうすればいいか。家族が困った時にどうすればいいか。困らないためには何をしなくちゃいけないか。そんなことがわかるようになるんじゃないかな？」
もつとも、と一拍置いて

「俺は勉強した事がないからさっぱりわからんけどな。」

と寂しく笑っていた。ふと目覚めてしまった。雑然と並んだベッドと色々な肌の色をした人たちをみて、この悪夢こそが現実でさっき見たのはやはり夢なのだと思ひ知らされた。あの夢が自分の思ひ出なのか願望が夢になったものなのかわからないまま、それでも優しく暖かかった過去を思い出して涙がとくとくと流れた。布団にふせて涙を流しているところから叫び声が入った。

夫人の大声によって家内は一時騒然としたが

「どうやら奥様が寝ぼけていらつしやうたようだ。」

という事で一件落着きということになる。夫人は憮然としてあんなハッキリした夢があるかしらなどのたまつたが、実際の所まどろみの中で見たそれを確実に夢でなかったというだけの自信はなかった。しかし、可哀想なことに彼女は次の日も早朝からまた叫び声を上げ

る羽目になる。

「もうあんな部屋で寝るの嫌ですからね。」

と夫人はその日をさかいにエウティケアと同衾するようになるが、夫人の寝相は相当なものであるらしくエウティケアはいち早くこれに音を上げる。彼が音を上げたのが妻の愛によるものなのか単に寝相によるものなのかは二人だけの秘密であるし誰もそれを知りたいとは思わなかった。妻の妄言の原因を突き止めたものには褒美をやるから何とかしてくれと家人の面前で醜態をさらす始末であった。

主人の提案を受けて奴隷たちのみならず雇い人、家族たちに至るまでの全員が家捜しを始めた。とは言え奴隷のほとんどが日々の仕事に追われて調査どころではなかったし、雇い人達もまた夫人の部屋を荒らして回る度胸は無く、結局の所、真剣に主人の提案に乗ったのは暇を持て余していたアウルスと如何に兄にたかるかしか考えていないエウティケアの実弟であるエウエリアス夫婦、夫人部屋付きの奴隷数人だけであった。

夫人が最後に悲鳴をあげてから四日ほど経ち、幽霊騒ぎが沈静化し始めた頃ようやくアウルスの食指が動いた。流行のミステリ小説を読むのに四日ゆつくりと時間を使ったことが彼の興味をより強いものにしたようだった。密室トリックという先進的な叙述法を使った最新作を読んで俺も推理したいと思ったようであった。彼はその願望にタリアを巻き込む事にした。推理小説には怪力で巨体な助手が居たので少し物足りなかったが居ないよりはましだろうという事で自分専属の奴隷を助手へと格上げすることにした。

タリアが部屋に入ると十七歳になったばかりの少年はまるで紳士のように煙草をくゆらせていた。言うまでも無くこれもまた推理小説に触発されたことによる。すぐにムフムフンと咳き込み火を消した。内心もう二度と吸うまいと思いつつヤニ臭くなった少年はタリアの眼を見た。

「どう思う。」

唐突過ぎて何への質問なのか判然としなかったため煙草のことだと

少女は考え

「臭いのであんまり好きではないです。残り香は嫌いじゃないですがモウモウと煙が有る部屋は嫌いです。」

単刀直入に答えた。

「そうじゃないよ。タリア君。」

普段は呼び捨てである。

「私が聞いているのはあの女がみた幽霊の事だよ。タリア君は本当に幽霊だと思うかい？」

あの女という響きに冷たいものを感じた。

「あまり詳しく存じ上げないのでわかりませんが早朝の事ですし奥様が寝ぼけてらっしゃったんじゃないのですか？」

「なるほど、タリア君にしては安直な答えだな。それではあの女が部屋を移って以来叫び声を上げていない事の説明がつかないだろう。結果には原因がある。その原因を突き止めるという行為こそ私の原動力なのだよ！」

急に語気を荒げた少年に驚かされ思わず

「はあ。」

と返事ともため息ともつかない言葉を吐いてしまった。アウルスは頭をかきながら

「ノリが悪いなあ。タリアもこれ読んどいてよ。」

そう言っただけ昨日の夜まで自分が読んでいた本をタリアによこした。

「お前がそれを読み終わったら事件の調査を開始するからな。さっさと読み終わらないと犯人言うぞ。」

手にとつて見ると「ツアイコフ家連続殺人事件」という小説だった。ツアイコフという旧王族の巨大な屋敷にたまたま招かれていたホーロックシャームズが人界から隔絶された屋敷で次々に起きる密室殺人を解決するという内容の推理小説である。いま皇国で聖書について二番目に読まれている小説なのだ謳われている。ちなみにこれは誇大広告であるとして後日取り消された。しぶしぶ少女は二日かけてその小説を読み自分の幼い主人が何を求めているかを早々に把

握した。アウルスの部屋に入るなり

「ご主人様、こんな難事件あつしには難しすぎやすぜ。」

小説の一部を引用して少年に話し掛けると彼は満面の笑みで

「難事件であるほど私の知的好奇心はかき立てられると言つ物だよ。

タリア君。」

と答えた。

家族（前編）（後書き）

アウルスがミィハーで間抜けすぎる気がする。もっとクールな少年にしたかったなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6604g/>

或いはそれこそが平穏な日々

2010年10月9日12時33分発行